

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K13380

研究課題名（和文）20世紀前半のインドネシアにおけるイスラーム運動とアラブ地域

研究課題名（英文）Indonesian Islamic Movements and the Arab Region in the Early 20th Century

研究代表者

山口 元樹（Yamaguchi, Motoki）

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：60732922

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀前半のインドネシア（当時のオランダ領東インド）におけるイスラーム運動とアラブ地域との関係について考察した。本研究が取り上げたのは、インドネシアの伝統派イスラーム団体ナフダトゥル・ウラマーによるアラブ地域のイスラーム改革主義運動の影響の受容とインドネシアのムスリムによるカイロ留学の2点である。ナフダトゥル・ウラマーについては、アラブ地域の改革主義運動の影響を受け入れ政治的な役割を果たすようになっていたことが明らかになった。他方で、カイロ留学については教育などの実態を解明するとともに、カイロ留学を経験した者たちがアラブ地域の思想を伝達する仲介者であったことを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の東南アジア・イスラーム研究では、アラブ地域との影響関係の重要性が強調されている。しかし、これまでの研究では、両地域の影響の伝達や受容のプロセスについては漠然とした説明に留まっていた。また、アラブ地域の影響は東南アジア側では受動的に受け入れられ、それが東南アジア社会の分裂をもたらすものとして論じられてきた。これに対し、本研究はアラビア語、インドネシア語、オランダ語の史料を用いることで複合的かつ実証的な分析を試みている。東南アジアのムスリムによるアラブ地域の影響の選択的な受容や、アラブ地域の影響が現地社会の統合を促す方向に作用した事例を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）： This study examined the relationship between Islamic movements in the Dutch East Indies (present-day Indonesia) during the first half of the 20th century and the Arab region. The study focused on two aspects: the reception of the influence of Arab Islamic reformist movements by the traditionalist Islamic organization in Indonesia, Nahdlatul Ulama, and the role of Indonesian Muslims who studied in Cairo. It was revealed that Nahdlatul Ulama had embraced the influence of reformist movements of the Arab region and played a political role. On the other hand, the study verified that those who had studied in Cairo served as intermediaries to transmit ideologies from the Arab region, while also investigating the actualities of education and other aspects related to studying in Cairo

研究分野：インドネシア近代史

キーワード：東南アジア史 インドネシア イスラーム アラブ地域 エジプト 留学

## 1. 研究開始当初の背景

インドネシアは住民の大多数がイスラームを信奉し、現在では世界最大のムスリム(イスラーム教徒)人口を抱える国である。インドネシア社会におけるイスラームの位置づけをめぐる、研究者の間で新しい議論が起こっている。かつては、Clifford GeertzのThe Religion of Java (1960)の影響もあり、インドネシア、特にジャワのイスラームを表層的なものとする見方が支配的であった。これに対し近年の研究では、インドネシアにおけるイスラームの重要性を強調する傾向が見られる。だが、いずれにせよこれまでの研究では、インドネシアの地域的な論理とイスラームの広域性・普遍性の双方を踏まえた考察が十分になされていない。そのような考察のために有効だと考えられるのが、インドネシアのイスラーム運動とアラブ地域との関係に着目することである。インドネシアとアラブ地域は、それぞれイスラーム世界における「周縁部」と「中心部」に位置する。インドネシアのイスラーム運動は、住民によるイスラームの受容が始まって以来、アラブ地域から多大な影響を受け続けてきた。

近代、特に20世紀前半は、インドネシアとアラブ地域との関係にとって決定的に重要な時期である。19世紀後半以降、蒸気機関や印刷技術に代表される西洋起源の科学技術の普及とともに、両地域間のコミュニケーションは緊密なものとなっていった。他方で、20世紀前半になると、インドネシアで国民国家が形成されていくとともに、現在まで存続する現地のイスラーム団体の多くが結成された。すなわち、20世紀前半には、アラブ地域からの影響が増加する一方、インドネシア内で新たな地域的秩序が形成され、その相互の動きの中でインドネシアのイスラーム運動が展開していったのである。

## 2. 研究の目的

本研究は、20世紀前半のインドネシアのイスラーム運動について、2つの問題を明らかにすることを目的とする。第一に、インドネシアのイスラーム運動がアラブ地域からもたらされた思想的影響をどのように受容したのかということ、第二に、ヒトの移動によって構築され、その影響を媒介した両地域間のネットワークの実態はどのようなものであったのか、ということである。前者についてはインドネシアの伝統派イスラーム団体ナフダトゥル・ウラマーを、後者についてはインドネシアのムスリムによるエジプトのカイロへの留学を取り上げる。

### (1) ナフダトゥル・ウラマーによるアラブ地域の思想的影響の受容

ナフダトゥル・ウラマーはジャワ農村部のキヤイ(イスラーム知識人)を主体に、1926年に東ジャワのスラバヤで結成された社会団体である。この団体は、東南アジアで優勢なシャーフイー学派法学の堅持と伝統的な宗教儀礼の保持を唱えるイスラーム伝統派の立場をとる。ナフダトゥル・ウラマーは現在ではインドネシア最大のイスラーム団体に発展している。近代においてインドネシアのイスラーム運動がアラブ地域から受けた思想的影響を論じる際、従来の研究はイスラーム改革派のみに注目してきた。これは、イスラーム改革派がアラブ地域のイスラーム改革主義運動への支持を明言したためである。だが、実際には伝統派のムスリムも、近代における社会状況の大きな変化に対応すべくアラブ地域のイスラーム改革主義運動の影響を取り入れていったものと推察される。さらに、ナフダトゥル・ウラマーに着目すべき理由として以下の点あげられる。第一に、この団体がジャワの農村部に支持基盤を持ってきたことである。そのため、表層的と理解されがちなジャワにおけるイスラームの位置づけを再検討することにつながる。第二に、近年のインドネシアでは、改革派よりも伝統派のナフダトゥル・ウラマーの中から、より革新的なイスラーム思想が生まれるようになってきていることである。その背景を探るためには、この団体が結成された20世紀前半のインドネシアのイスラーム伝統派についても検討する必要ある。

### (2) インドネシアのムスリムによるカイロへの留学

19世紀末までは、イスラーム諸学を極めようとするインドネシアのムスリムは、ほとんどの場合はメッカに向かった。だが、20世紀に入ると、エジプトのカイロに留学する者の数が増加し始める。その理由としては、まず、カイロがアラブ地域における出版・近代教育の中心地として発展したことがあげられる。さらに、19世紀後半から20世紀前半のカイロでは、ムハンマド・アブドゥフやラシード・リダーらの主導するイスラーム改革主義運動が展開しており、インドネシアのムスリムも多大な関心を寄せるようになったことが指摘される。

したがって、20世紀前半におけるアラブ地域からインドネシアへの思想的影響の伝達を考える上で、カイロへの留学生が果たした役割の重要性は無視しえない。だが、インドネシアからメッカへの巡礼者や留学生と比べると、20世紀前半のカイロへの留学については具体的な分析がなされていないままである。カイロ留学生のネットワークを介したアラブ地域からインドネシアへの思想的影響の伝達を明らかにするには、まず留学の実態を検証しなければならない。すなわち、インドネシアのムスリムの中でどのような人々が、いかにしてカイロに留学し、留学先でどのような生活を送ったのか、そして帰国後にどのような影響をもたらしたのかということである。また、カイロはインドネシアのムスリムの中でも改革派を引き付けたと見做されがちであ

るが、実際には伝統派に属するムスリムもカイロに留学している。この点についても留意する必要がある。

### 3. 研究の方法

本研究は、文献史料に基づいた歴史研究である。上記の内容についてそれぞれ以下のような分析方法と史料を用いる。

#### (1) ナフダトゥル・ウラマーによるアラブ地域の思想的影響の受容

この団体の指導的人物の著作を、アラブ地域のイスラーム改革主義の思想家のものと比較しながら分析していく。アラブ地域のイスラーム改革主義の思想家の著作への言及やそれらからの引用には特に注目する。史料としては、ナフダトゥル・ウラマーの指導的人物の著作、特にこの団体の発行した定期刊行物に掲載された論説やパンフレットを用いる。

#### (2) インドネシアのムスリムによるカイロへの留学

カイロ留学をしたインドネシアのムスリムについて、出身地・家系、宗教的な傾向、留学前に受けた教育、カイロへの移動の方法や経路、留学中の活動、そして帰国後の経歴などを検討する。留学中の活動については、特にエジプトのイスラーム知識人との交流に着目する。それによって、イスラーム世界の「中心部」のムスリムと接触することで、インドネシアのムスリムが自分の出身地の地域的な論理とイスラームの広域性・普遍性の関係についてどのような見解を抱くようになったのかを考察する。史料としては、インドネシア及びエジプトで発行された定期刊行物、オランダ植民地政府の報告書を用いる。

### 4. 研究成果

補助金を受けた期間のうち、2020年度と2021年度は世界的な新型コロナウイルス感染拡大の影響で予定していた海外での調査をおこなうことができなかった。しかし、2019年度と2022年度には、オランダのライデン大学図書館と国立公文書館（ハーグ）、そしてトルコのオスマン文書館（イスタンブール）で資料調査を実施した。これらの資料調査によって、アラビア語とインドネシア語の定期刊行物やオランダによる植民地文書を入手することができた。中でも大きな成果は、カイロのインドネシア人留学生に関するオランダ植民地政府の文書を大量に発見できたことである。この資料は既存の研究ではほとんど使われていないが、1920年代後半から30年代末におけるインドネシアのムスリムによるカイロ留学の実態について詳細な情報を与えてくれる。

収集した資料に基づく研究成果は以下のとおりである。

#### (1) ナフダトゥル・ウラマーによるアラブ地域の思想的影響の受容

インドネシアでは1930年頃からオランダによる植民地支配が終わる42年にかけて、イスラームとナショナリズムの関係をめぐる論争が起こった。この論争について従来の研究が取り上げてきたのは、スカルノとモハマド・ナシルが交わした議論のみであった。しかし実際には、ナフダトゥル・ウラマーをはじめ、多様な人物や団体がこの論争に関与していた。ナショナリズムをめぐるインドネシアのイスラーム勢力内の立場は、以下の3つに分かれていた。すなわち、汎イスラーム主義を唱えてナショナリズムを否定するもの、ナショナリズムは認めるがイスラーム国家の建設を目指すもの、ナショナリズムを認めて政教分離した国家を目指すもの、である。ナフダトゥル・ウラマーは、ナシルと同じくこのグループに属していた。ただし、当時のナシルが世俗的ナショナリストに非妥協的であったのに対し、ナフダトゥル・ウラマーは彼らにより融和的な姿勢を見せていた点に相違がある。

また、興味深いのは、ナフダトゥル・ウラマーがこの論争の中でアラブ地域のイスラーム知識人の著作を利用していることである。この団体の機関誌には、スカルノの政教分離論への反論としてレバノン出身の思想家シャキーブ・アルスラーンとエジプトの法学者アブドゥルワッハーブ・ハッラーフの著作のインドネシア語訳が掲載された。これら二人のアラブ地域のイスラーム知識人はいずれもイスラーム改革派に属し、本来であればナフダトゥル・ウラマーとは考えが異なる。また、とりわけハッラーフの著作のインドネシア語訳には、内容の追加や修正がなされており、原著をインドネシアの政治状況に適用させようとするナフダトゥル・ウラマーの意図が認められる。

以上のことから、オランダ植民地末期には伝統派の立場をとるナフダトゥル・ウラマーも、アラブ地域のイスラーム改革主義の影響を柔軟に受け入れるようになっていたこと、この団体がナショナリズムをめぐる論争において世俗的ナショナリストに融和的な姿勢を示しながら、「イスラーム国家」の実現を模索していたことが明らかになった。伝統派のムスリムは、既にオランダ植民地末期にはある種の革新的な思想を示すようになり、政治的にも一定の役割を果たすようになっていたと言える。

#### (2) インドネシアのムスリムによるカイロへの留学

まず、上記の1930年代から42年におけるイスラームとナショナリズムをめぐる論争におい

て、カイロ留学を経験したインドネシアのムスリムがアラブ地域の思想を伝える仲介者としての役割を果たしていたことが明らかになった。カイロのインドネシア人留学生は、1930年頃にアラビア語の定期刊行物に度々投書し、ナショナリズムとイスラームに関する見解をアラブ地域のイスラーム知識人に尋ねていた。彼らの質問に対し、アラブ地域のイスラーム知識人は、いずれもイスラームとナショナリズムは矛盾しないと返答している。アラブ地域のイスラーム知識人の論説は、1930年代後半以降インドネシアにおいて、ナショナリズムを擁護するために用いられた。

次に、20世紀前半のインドネシアのムスリムによるカイロ留学の実態については以下のような点が明らかになった。まず留学生の人数は、1920年代半ばから1930年代後半まで間、100名前後で推移していたと見積られる。彼らの出身地としては、1920年代後半にはジャワとスマトラがほぼ同数であるが、1930年代後半までにジャワ出身者の数は大幅に減少している。留学生の一般的な特徴は、独身の男性で、商人、農民、宗教教師などを親に持つ中産階級に属し、オランダに留学したインドネシア人ほど裕福ではなく、インドネシアで高度な西欧式の教育を受けていない、というものである。彼らの多くは、カイロに渡る前にメッカに逗留し、大巡礼を済ませたり勉学を修めたりしている。カイロでは賃借りした部屋か、アズハル付属のリワークやその他の施設の宿舎に居住し、大半の者は故郷からの仕送りで生活した。インドネシアのムスリムがカイロを留学先として選んだのは、宗教的な知識だけでなく近代的な知識も身に付けるためであった。当時イスラーム諸国の中で発展していたエジプトは、独立後のインドネシアのイスラーム社会のモデルになると見做されていた。しかし、インドネシア人留学生のほとんどが入学したアズハルの教育は、近代性という点で期待に応えるものではなかった。そのため、ダール・アル＝ウルーム、カイロ大学、カイロ・アメリカン大学といったカイロにおけるより近代的な教育機関、さらにヨーロッパの大学へと学習の場を移す者もいた。

以上のように、まずインドネシアのムスリムによるカイロ留学によって構築されたネットワークは、アラブ地域からインドネシアへの思想の伝達において重要な役割を果たしたと言える。その一方、カイロにおける教育、特にアズハルのものは、インドネシアのムスリムが望んでいた近代的なものでなかった。したがって、その後のインドネシアにおけるイスラーム教育へのカイロ留学のインパクトは過大評価するべきではないと考えられる。

#### 今後の課題

本研究には以下のような課題が残った。まず、ナフダトゥル・ウラマーに関しては、思想的な側面を主な分析対象としたため、組織活動については十分に検討することができなかった。この団体の思想的な変容をよりよく理解するためには、執行部のメンバーなども併せて分析しなければならない。次にカイロのインドネシア人留学生に関しては、時期による人数の増減や出身地の大きな偏りが見られる。これらの要因については、この研究では明らかにすることが出来なかった。これを考えるためには、当時のインドネシア各地の社会経済的な状況を踏まえた研究が必要となる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 山口元樹	4. 巻 特別号
2. 論文標題 モハンマド・ラシディの「知識を求める旅」：20世紀前半におけるインドネシアからカイロへの留学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 なじまあ	6. 最初と最後の頁 71-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山口 元樹	4. 巻 58
2. 論文標題 イスラームの文字，マレーの文字	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東南アジア研究	6. 最初と最後の頁 141～163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20495/tak.58.2_141	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 ナフダトゥル・ウラマーの「イスラーム国家」論：オランダ植民地期インドネシアにおける伝統派ムスリムの変容
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「東南アジアにおけるイスラーム主義と社会・文化要因の相互作用に関する学際的研究 トランスナショナルなネットワークと現地の応答」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 イスラームの文字・マレーの文字：国民国家独立期インドネシアにおけるジャウィ復活論とマラヤ
3. 学会等名 東南アジア学会中部例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山口元樹
2. 発表標題 オランダ植民地期インドネシアからのエジプト留学：知の獲得とイスラーム運動とのネットワーク
3. 学会等名 シンポジウム「アジアの海を渡る人々：18・19世紀の渡海者」（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Hirosue Masashi (ed.); Kitagwa Takako; Kudo Yuko; Makino Motonori; Miyata Etsuko; Taga Yoshihiro; Tsuboi Yuji; Yamaguchi Motoki	4. 発行年 2020年
2. 出版社 The Toyo Bunko	5. 総ページ数 232
3. 書名 A History of the Social Integration of Visitors, Migrants, and Colonizers in Southeast Asia	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------